

平成二十五年 度

豊島岡女子学園中学校
入学試験問題

(一回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は 一 から 三、三ページから二十一ページまであります。
合図があつたら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従つて解答らんに記入してください。

□ 次の―線部のカタカナを正しい漢字に直しなさい。(送り仮名がある場合、送り仮名は平仮名で書くこと。一画一画でいいいにはつきりと書くこと。)

- 1 彼のハイシン行為は許しがたい。
- 2 彼女はヒキこもごもの複雑な気持ちになった。
- 3 問題が起きた場合にスミヤカに行動できる体制を整える。

□ 次の文章を読んで、後の一から十二までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

学問とは広い言葉で、精神を扱うものもあるし、物質を扱うものもある。修身学や宗教学、哲学などは精神を扱うものである。天文、地理、物理、化学などは物質を扱うものである。いずれもみな知識教養の領域を広くしていつて、物事の道理をきちんとつかみ、人としての使命を知ることが目的である。知識教養を広く求めるには、人の話を聞いたり、自分で工夫をしたり、書物を読むことが必要だ。であるから、学問をするためには文字を知ることはもちろん必要だけれども、むかしの人が思っていたように、ただ文字を読むことで学問だと思うのは見当ちがいである。

文字は学問をするための道具にすぎない。たとえば、家を建てるのに、かなづちやのこぎりといった道具がいるのと同じだ。かなづちやのこぎりは建築に必要な道具ではあるけれども、道具の名前を知っているだけで、家の建て方を知らないものは大工とは言えない。これと同じで、文字を読むことを知っているだけで、物事の道理をきちんと知らないものは学者とは言えない。いわゆ

る「論語読みの論語知らず」というのはこのことである。

『古事記』は暗誦しているけれども、いまの米の値段を知らないものは、実生活の学問に弱い人間である。『論語』『孟子』や中国の史書については詳しく知っているけれども、商売のやり方を知らず、きちんと取引ができないものは、現実の経済に弱い人である。何年も苦勞し、高い学費を払って西洋の学問を修めたけれども、独立した生活ができないものは、いまの世の中に必要な学問に弱い人間だと言える。こうした人物は、ただの「文字の間屋」と言つてよい。「①飯を食う字引」にほかならず、国のためには無用の「X」であつて、経済を妨げるタダ飯食いと言える。

(中略)

世の中の②悪いことわざに、「泣く子と地頭には勝てない」とか、また「親と主人は無理をいうもの」というものがある。これらを、人権など侵害してもかまわない、といったニュアンスで使うものがあるけれども、これは現実のあり方と*権理をとりちがえた議論である。地頭と百姓とは、現実のあり方はまったく異なるけれども、それぞれが持つ権理は同じである。百姓の身に痛いことは、地頭の身に痛い。地頭の口に甘いものは、百姓の口にも甘い。痛いものを遠ざけて、甘いものを求めるといふのは、人として当然の感情である。他人の迷惑にならないで、自分のやりたいことをやるといふのは、その人の当然の権理なのである。

この権理に関しては、地頭も百姓もまったく違いがない。ただ、地頭は金があり、権力を持ち、百姓は貧しくて弱いという違いがあるだけだ。貧富強弱は、現実のあり方であつて、みなが同じというわけではない。であるから、金があつて社会的権力が強いからといって、社会的弱者へ無理なことをしようとするなら、これは力の差を利用して他人の権理を侵害することになる。

(中略)

幕府をはじめとして、すべての大名の領分にも小さな政府が作られて、百姓や町人を勝手に取り扱つた。一見慈悲があるように見えても、③実際のところは、人民に本来天から授けられているはずの人権を許すことはなく、ひどい扱いが多かつた。

そもそも政府と人民の関係というのは、現実として社会的強者と弱者というような違いがあるだけであつて、基本的人権に関し

てはまったく同等である。百姓は米を作つて人を養い、町人は物を売買して世の中の便利の役に立つ。これがすなわち百姓・町人の商売である。

政府は法律をつくり、悪人を罰し、善人を守る。これが政府の「商売」というものだ。この「商売」には莫大な費用がいるけれども、政府には米も金もない。百姓・町人から税金を出してもらつて、その財政をまかなおうということで、政府と人民が双方相談を取り決めたのだ。これがすなわち、政府と人民の約束「社会契約」である。

だから、百姓や町人は税金を出して法律を守れば、その社会的責任を果たしているといえる。政府の方は税金を正しく使つて、人民を守ればその責任を果たしたといえる。双方が責任を果たして約束を破ることがなければ、言うことはない。④それぞれが権理を堂々と主張して、それを妨害する理由など何もない。【ア】

ところが、幕府の時代は、政府のことを「御上様」といつて、その御上の「御用」といふのが、⑤やたらと威光をふりかざした。道中の宿屋でもただ食ひし、渡し場でも銭を払わず、荷物運びの労働者にも報酬を与えない。ひどいのにはいたつては、御用にかかわる人間が、そうした労働者をゆすつて酒代まで取ることさえもあつた。無茶苦茶である。

あるいは、殿様の物好きで建築をしたり、役人の勝手で必要もないことをやつたりする。無駄に金を使って必要な金が不足したなら、いろいろ理由をつけて年貢を増やし、これを「御国恩に報いる」と言つたりしていた。【イ】

「A」、その「御国恩」といふのは何を指して言うのか。百姓や町人が安心して家業を営んで、盗賊や人殺しの心配もなく生活しているのは、政府のおかげ。『御恩』なのだ、というつもりなのだろう。「B」、このように安心して生活できるのも、政府の法律があるためだが、法律を作つて人民を保護するのは、「C」政府の商売であつて当然の責任である。「御恩」などと言ふべきではない。政府が人民に対して、人民を保護することを「御恩」とするのならば、百姓・町人の方も政府に対して、その年貢をもつて「御恩」と言うのがふさわしい。政府が人民の訴訟を「御上の迷惑」と言うのならば、人民もまた言い返してやればいい。「私たちが作つた十俵の米の中から五俵の年貢を取られるのは、大いなる迷惑です」。【ウ】

ともかく、お互いに等しく恩というものがあつたのなら、どちらか一方が礼を言つてどちらかが言わないというのは、理屈に合わない。

このような悪い社会的慣習というのが起こつた由来を調べていくと、その大元は、人間というものが平等の人権を持っているということをきちんと認識せずに、社会的な貧富・強弱というものを盾にとつて、強い政府が弱い人民の権理を妨害してきたことにある。だから、人は平等の人権を持っているということを忘れてはいけない。これが人間の世界において最も大切なことである。初編のはじめに言っている「人はみな同じ権理を持ち」というのはこのことである。

このように言つて、⑥百姓や町人に味方して、思うように権理を主張せよ、と言つていふように見えるかもしれないが、また別の観点もある。

人を取り扱うにあつては、その相手によつて扱い方も変わってくるものなのだ。人民と政府との間柄は、もともとは同一のものである。ただし、その社会的役割を区別して、政府は人民の代表となつて法律を整備して、人民はこの法律を守ろうと約束した。

いま、この明治の日本にいる者は、いまの時代の法律にしたがうと約束をしたのである。ひとたび国の法律と定まつたことは、個人のために不便があつたとしても、正式な改正の手順を踏まずには、これを変えることはできない。氣をつけてこの法律を守るべきである。これは人民の責任である。【エ】

しかし、学問がなく、物の道理も知らず、食つて寝るしか芸がない人間がいる。無学のくせに欲は深く、ぬけぬけと人をだまして、法律逃れをする人間がいる。国の法律がどのようなものかということも知らず、自分の仕事の責任というものも果たさず、子どもは生むけれども、その子どもをきちんと教育するというやり方も知らない。いわゆる、⑦恥も法も知らないバカ者である。その子孫が繁栄したとすれば、この国の利益にはならず、かえつて害をなすものとなる。このようなバカ者は、とても道理をもつては扱えない。【オ】

不本意ではあるけれども、力でおどし、一時の大きな害をふせぐほかにやり方がないということになつてしまふ。これが世の中に暴力的な政府がある理由である。わが国の旧幕府だけでなく、アジア諸国はむかしからそうであつた。

そうだとすると、ある国の暴力的な政治というのは、暴君やとんでもない官僚のせいばかりではない。その大元は、国民の無知が原因であつて、自ら招いたわざわいとも言える。人にけしかけられて暗殺を企てるものがあつたり、新法を誤解して一揆を起すものがあつたりする。*強訴を名目として、金持ちの家を襲つて酒を飲んで錢を盗むものもある。そのやり口は、人間のやることとは思えないほどにひどい。このような社会的に害のある人間を取り扱うのには、釈迦も孔子も名案がないに決まつている。どうしても厳しい政治を行わざるをえないのだ。

(『現代語訳 学問のすすめ』 福澤 諭吉著 齋藤 孝訳)

〔注〕 * 権理||権利。

* 強訴||正規の手続きを踏まず、集団で上位者に訴え出ること。

問一 空らん「X」に漢字二字の言葉を入れて、慣用句を完成させなさい。

問二 一線①「飯を食う字引」とは、どのような意味ですか。答えとなる部分を本文中から三十五字以内で探し、最初と最後の三字を抜き出さない。

問三 ―線②「悪いことわざ」とありますが、なぜ「悪い」というのですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これらのことわざが、人間は身分に関係なくだれでも平等に人権が備わっていると認めているように、解釈できるから。
 イ これらのことわざが、金銭的に裕福な者が社会的権力を持つという人々の認識を裏付けているように、解釈できるから。
 ウ これらのことわざが、他人に迷惑をかけることでも強引に推し進めることを称賛しているように、解釈できるから。
 エ これらのことわざが、社会的弱者は権力者の前では自由な振舞はできないことを容認しているように、解釈できるから。
 オ これらのことわざが、無知であることで逆に得をするという社会の矛盾をただ面白がっているように、解釈できるから。

問四 ―線③「実際のところは、ひどい扱いが多かった」とありますが、「幕府をはじめとして、すべての大名」のこのような「ひどい扱い」を正当化する言葉を本文中から七字で探し、抜き出しなさい。

問五 ―線④「それぞれが権理を堂々と主張して」とありますが、ここで言う「権理」とはどういうことですか。「〜ということ」につながる形で本文中から二十五字以内の部分を探し、最初と最後の五字を抜き出しなさい。

問六 ―線⑤「やたらと威光をふりかざした」とありますが、「威光をふりかざす」とは、ここではどういうことですか。答えとなる部分を本文中から二十字で探し、最初の三字を抜き出しなさい。

問七 空らん「A」「B」「C」に入れる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア A	もともと	B	たとえば	C	むしろ	イ A	そもそも	B	たしかに	C	もともと
ウ A	ところで	B	なぜなら	C	そもそも	エ A	たとえば	B	つくづく	C	なぜなら
オ A	なぜなら	B	そもそも	C	たしかに						

問八 ―線⑥「百姓や町人に味方して、別の観点もある」とありますが、「別の観点」とはどのような「観点」ですか。三十字以内で答えなさい。

問九 ―線⑦「恥も法も知らないバカ者」とありますが、これを言い換えた表現を本文中から十字で探し、抜き出しなさい。

問十 次の一文を入れるのに最も適当な部分を本文中の【ア】～【オ】の中から一つ選び、記号で答えなさい。

《しかしこれでは、いわゆる「売り言葉に買い言葉」で足りがなくなる。》

問十一 本文の内容に合うものとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人民を保護することなく高額の税金を求めるような政府は、人権ということを認識しておらず、社会的強者であることがすべての権限を保有することであると誤解しているのである。

イ 強力な政治的力のために個人が自由に生きられないような社会を否定し、法律に頼ることなく自由に生きる存在としての個人のあり方を取り戻すためには、教育が最も重要である。

ウ 人はみな、日本の古典や中国の書物を読み、暗誦することが必要であり、そうすることでだれもが政治に参加でき、高圧的な政治を回避することができるのである。

エ 人民は国家なくして存在することはできず、常に国家に守られている以上、個人は国家のために穀物を生産し、ものを流通させるという役割を持っているのである。

オ 天が人間をつくった時には、身分の上下や貧富の差がないようにつくったはずであり、現在のような差別意識を生み出した人間社会に問題を求めなければならないのである。

問十二 筆者は「学問の目的」をどのようにとらえていますか。本文中から四十字程度で探し、最初と最後の五字を抜き出しなさい。

三

次の文章を読んで、後の一から十一までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いは全て句読点・記号も一字とする。)

コンピュータ会社に勤めている僕は、同僚の「みのり」と交際している。みのりはとてもおとなしい性格で、ご飯は土鍋で炊き、常に自家製の漬物は欠かさないといった素朴な面を持ち合わせている女性である。僕はそんなみのりの、内に蓄えられた力に強く惹かれていた。本文は僕が出張で一人北陸のとある町を訪れている場面である。

そういえば、ここは上位に入っていた。テレビのクイズ番組での都道府県ランキングだ。正確な場所のわからない県。地図上の位置を指せという問題にタレントが頭を抱え、事前に行ったアンケートの結果が示された。誤答率が高かったのは、人口の少ない県とほぼ重なっていた。

一緒に観ていたみのりがつまらなそうに呟いた。

「どうせそんなことだと思った」

みのりの出身地は場所を覚えてもらえない県の一位か二位だったのだ。

「私なんて、出身地をいうと、砂漠のあるところですか、なんて訊かれたりするの。みんな、日本に砂漠があると本気で思ってるのかな」

「それはみのりがからかわれているだけなんじゃない」

そういうと①彼女は驚いたようにこちらを向いた。砂丘と砂漠を間違える人なんていないだろう。みのりには聡いところと鈍いところが混在していて、ときによつてそのどちらが顔を出すか読めないことがあった。

「砂漠生まれだなんて、かつこいと思うけど」

僕がいうと、みのりはほんの少し背を反らせた。すびん、すびん、と海中で*ターンする魚の背みたいだ。海と砂漠はずいぶん違うけれど、もしも砂漠に放り込まれたとしても、みのりなら淡々と泳ぎ切るだろう。そういう強靱さを、みのりは隠し持っている。実際にその強さを目の前に突きつけられたことはないから、僕が勝手に感じているだけかもしれない。でも、なんとなく思うのだ。彼女の不意の跳躍に僕はついていけないのだろうか。

定刻通りに着いた特急を降りると、ホームはひとつしかなかった。*跨線橋を渡り、一箇所だけの改札を抜ければ、ベンチが二列並んだ駅舎にほとんど人影はない。普段出社するのと同じような時刻に新幹線に乗り、②今、ちょうどお昼だ。お昼のはずだ。それが、空の暗さのせい、低く鈍い風のせい、夕刻を思わせる。駅舎を出ると高い建物がない。ない、というよりも、ある、という感覚に近いだろうか。丈の短い建物が、ある。その上に、重たそうに垂れ込めた雲が、ある。映画のセットみたいだと思っ

た。

ビルが「3」。デパートが「4」。駅前の広場にはタクシーが数台止まっているだけだ。それなのになぜか、「5」、という感じがしない。山が近い。「6」、というこの感じはどこから来るのだろう。懐かしいこの感じ。

北陸本線の中に売り子は来なかった。どこかでお昼を食べておこうと歩き出しながら僕は、ふと浮かんだ「懐かしい」という言葉に⑦首を捻っている。生まれも育ちも東京だ。この町へ来たことはない。出張でもなければ来ることもなかったと思う。似た場所を見たことがあったのだろうか。湿った風が吹いて、また、懐かしい、ような気がしている。

(中略)

契約がまとまって、ほっとしたときだった。さつき感じた懐かしさが濃くなっていることに気がついた。何がどう懐かしいのかわからないまま、僕は応接室の中を見まわす。見当たらない。懐かしいようなものは何もない。

ではこれで、と立ち上がったときに、また香った。懐かしい匂いをかいだ、気がした。違う、懐かしい音楽を聴いた感じだろう

か。僕は顔を上げ、相手の顔をまじまじと見た。

「どうかしましたか」

「いいえ、と僕は答える。血の流れが滞り、ざわざわざわ逆流しようとしている。

「あの、恐れ入りますが」

思いつきを確かめるべきかどうか、⑧ほんの少し迷った。

「別れの挨拶を、どうおっしゃいますか」

相手は*怪訝な顔をしている。

「さようなら、のことですか」

「ええ、そうですけれども、今、その前にちよつと違うようなことをおっしゃいましたよね」

しばらく首を傾げていた相手がようやく、ああ、と照れ笑いをする。

「なまた、ですかね」

「それです、それはこの辺の方言のようなものでしょうか」

「ほんならまた、が縮まったんですかね。まあ、方言ですよ。あんまり意識したことはなかったですけど。私は若い頃は東京にいたもので、話し言葉は標準語だと思ってるんですが、どうでしょう」

どうでしょう、といわれて返答に詰まる。ひとつずつの単語はいわゆる標準語かもしれないが、イントネーションが微妙に違う。喋り言葉は全体的に一本調子で、語尾が歌うように伸びる。久しく忘れていた旋律。

「なまた、以外にも、さようならの意味で使う言葉がありますよね。なんだったかな、ええと」

旋律が耳に残るうちに僕は記憶を遡り、質問を重ねる。なまた、なまた、といってみる。

「どうかなあ、子供でも今どきはみんなバイバイいってると思いますけどねえ」

応接室を出ながら僕は焦っている。何か、なんだったか、すごく近づいている。懐かしい風の吹く場所まで、もう少しだ。社屋を出て曇った空を見上げた途端、記憶の中で小さな声が聞こえた。

「ほなの」

思わず足を止めた。そうだ、ほなの、といったんだった。聞き返すと、あの子は耳まで真っ赤になったのだ。

「なに？」

僕もつい小さな声になった。もう少し大きな声でいつてくれたら、聞き取れなくてもなんとなく意味はつかめていただろう。でも、言葉そのものがわからなかった。

じ、じ、とあの子はいった。僕は黙って待った。けれども、じ、と繰り返した後、彼女は目にいっぱい涙を溜めて駆けて行ってしまった。そんなつもりではなかった。彼女の言葉を他の級友たちのようからかうようなつもりはまったくなかった。ふたりで当番日誌を職員室へ出しに行った後の、児童玄関の薄暗さがよみがえる。スニーカーに履き替えようと上履きを脱いだまま、小学四年生だった僕は遠ざかる彼女の後ろ姿をただ見ているしかなかった。

昼に駅を降りたときからこつこつとノックしていたのはあの子だったのだ。定食屋で女主人に話しかけられたときに感じた懐かしさも、*商談の間じゅうずっと僕をさわつかせていたのも、あの子だった。

瑞穂という名前だった。新学期に合わせてではなく、中途半端な季節に唐突に彼女は転校してきた。素晴らしい名前ですね、と担任がいったのを覚えている。

「日本のことを古くは瑞穂の国といったのです」

先生が紹介する間、髪を後ろでひとつに結んだ女の子は黒板の前で恥ずかしそうにうつむいていた。

「……谷川瑞穂です。よろしくお願いします」

彼女がそういってお辞儀をしたとき、なんともいえない空気が級友たちの間に広がった。おかしいことはしていないし、いって

いない。それなのに、⑨どこかが変だった。言葉を話すときの波の山がずれる。彼女の言葉は一音の半分の半分ほどずれた旋律に乗せられていて、僕はそれにどう反応していいかわからなかった。

それでみんな笑ったのだと思う。彼女が話すと、教室のどこからくすくすと笑う声が聞こえる。すると彼女はうつむいてしまふ。赤くなった耳と、そこにかかる*後れ毛を僕は何度も見た。彼女が授業中に当てられて、緊張のあまり余計におかしくなってしまう言葉遣いを冷やかされるのを何度も聞いた。笑うなよ、と怒鳴ったはずの僕の声は、しかし半径一メートルに届くのがやつとだ。谷川瑞穂がゆつくりと振り返る。⑩その心細そうな顔に光が差しているのを僕は見る。いちばん届いてほしい人にだけ、僕の声は届いたのだ。

⑪じゃあね、だなんて、誰でもいつでも簡単に口に出せる言葉だと思っていた。だけど、そうじゃない。彼女は、生まれたときから親しんできた言葉を、ぱつと脱ぎ捨てるみたいに器用に替えてしまうことができなかったんだろう。あのとき彼女は、じゃあね、という代わりに、ほなの、といったのだ。僕に気を許していたからつい出てしまったのか、それとも、僕を試していたのか。ほなの、といわれた僕が自然に手を振り返せばそれで彼女は救われたのか。

確かめようもないことばかりだけれど、ひとつだけ確かなことがある。僕は彼女が好きだった。教室にいる彼女はいつも口を結んでいただけで、僕は知っていた。この子には、何かがある。いつか花開く力を胸の奥深くに隠している。

どんよりと曇った空を見上げて僕は少し笑った。⑫十歳の頃から全然成長していないみたいだ。幻想だ。いつか花開く、いつか跳ぶ。⑬そんないくつかの予感に揺れていないで、今を見るべきだったと思う。

年が明け、春が来るのを待たずに彼女はまた転校していった。かつて住んでいた土地に戻ったのだと聞いた。それが、ここだ。確信があった。谷川瑞穂はここから来て、ここへ帰っていった。だから懐かしかった。あんなに波立った。

もしかしたら、瑞穂は今でもここに暮らしているのかもしれない。すっかりおとなになった彼女がすぐそこを歩いているかもしれない。

れない。でも、会ってみたいとは思わない。いつもうつむいていた華奢な後ろ姿がどんなふうにか開いたのか、どんな女性になったのか、想像するだけのほうがきつといい。そう考えながら、駅へ向かう道で背の低い町並みを見まわしている。瑞穂がいないか探している。

瑞穂を思い出そうとして目に浮かぶのは、みのりの笑顔だ。みのりはたぶん瑞穂に似ている。似ているから好きなのではなく、好きな子がたまたま似ていた。——思わず笑ってしまう。こういうのを、好きなタイプっていうんじゃないか。北陸の低く曇った空みたいにもそこにあつて、何か持っていそうな、今にも何かを降らせそうな、ときどきは重たくてうつとうつような。そんなタイプだといわれてよろこぶはずもないけれど。

みのりが跳ねるところを見たい。跳ねずにおとなしいまま暮らしていくのだとしても、僕はそれを近くで見届けたいと思う。

(『秋の転校生』 宮下 奈都)

〔注〕 * ターンⅡ回転すること。また、向きを変えること。

* 跨線橋Ⅱ鉄道線路の上をまたぐように架け渡した橋。

* 怪訝な顔Ⅱ理由や事情が分からなくて、不思議に思っている表情。

* 商談Ⅱ商売についての話し合い。

* 後れ毛Ⅱ女性の、ほつれて下がった髪の毛。

問一 線①「彼女は驚いたようにこちらを向いた」とありますが、みのりが驚いたのはなぜだと考えられますか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア みのりは日本には砂丘しかなく砂漠などあるはずがないと思っていたが、僕の指摘によって実は日本にも砂漠があり、それを知らないみのりを周囲の人たちが面白がっていただけだということに気がついたから。

イ みのりはこれまで砂丘と砂漠がほとんど同じものだと思っていたが、両者が実は全く異なっているということに僕に指摘され、自分が周囲からその無知さを馬鹿にされていただけだということに気がついたから。

ウ みのりは周囲の人たちが砂丘と砂漠の区別を本当に分かっていないと思っていたが、僕の指摘によって実は皆自分の前でわざと間違えて見せ、逆にみのり自身の理解を確かめようとしていたということに気がついたから。

エ みのりは皆が自分の出身県のことを詳しく知らないのは砂丘と砂漠の区別がつかないことと関係していると思い込んでいたが、僕の指摘によってそれは実は人口の少なさと関係があるということに気がついたから。

オ みのりは周囲の人たちが自分の出身県には砂丘ではなく砂漠があると勘違いしていると思っていたが、僕の指摘により実は皆両者の区別を知っていながらわざと冗談めかした質問を投げかけていたことに気づいたから。

問二 線②「今、ちようどお昼だ。お昼のはずだ」には僕のどのような様子が表れていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 普段出社するのと同様の時刻に出発したのに、なぜか夕方近くに到着してしまったことと理由が分からず動揺している。

イ 普段出社するのと同様の時刻に出発したのに、夕方まで到着時間が遅れてしまう地方の交通事情の悪さに憤っている。

ウ 出発時間とここまでの所要時間を考えるとまだお昼のはずだが、どんよりと薄暗い景色を見てその確信が揺らいでいる。

エ 出発時間とここまでの所要時間を考えると、約束した商談の時刻に間に合わないわけがないと自分に言い聞かせている。

オ 出発時間と所要時間を考えるとまだお昼のはずだが、夕方のような薄暗い景色を見て田舎にきたことを後悔している。

問三 本文中の空らん「3」「6」に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 3 ある 4 ある 5 ある 6 ない

イ 3 ある 4 ない 5 ある 6 ない

ウ 3 ない 4 ない 5 ない 6 ある

エ 3 ない 4 ない 5 ある 6 ある

オ 3 ない 4 ない 5 ない 6 ない

問四 線⑦「首を捻っている」とありますが、なぜ僕は「首を捻っている」のですか。四十字以内で説明しなさい。

問五 線⑧「ほんの少し迷った」とありますが、次のア～オの中でその理由の説明として適当なものには○、適当でないものは×を書いて答えなさい。

ア 今まで仕事の話をしていたのに、突然個人的関心から方言の話題を持ち出すと先方は意味が分からず困惑しかねないから。
イ 契約を結んでくれた相手なのに、方言を話題にして東京で暮らしたことがある先方の自尊心を傷つけたくなかったから。
ウ 懐かしさを感じるのには相手の発したこの地方独特の別れの挨拶と何か関係があるような気がしたが、確信がなかったから。
エ 商談相手に別れの挨拶を聞き返すと相手の方言を馬鹿にしていたことに気づかれ、先方の気分を害することを恐れたから。
オ 交渉相手に突然方言の話題を持ち出すと、相手との商談に集中していなかったと思われかねないことを心配したから。

問六 線⑨「どこかが変だった」とありますが、これより前の部分に、小学生の頃の瑞穂の話し方を推測できる二文続きの箇所があります。その箇所を本文中から探し、一文目の最初の五字を抜き出ささい。

問七 ―線⑩「その心細そうな顔に光が差している」とありますが、この時の瑞穂の心情を推測したものとして最も適当なものを

次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 皆が自分の言葉遣いをからかう中、僕だけが自分に加勢し皆に勇敢に立ち向かってくれたことで、自分に対する僕の気持ちに嘘偽りが全くないことが分かり胸がときめいた。

イ 皆が自分の言葉遣いをからかう中で、僕一人が自分を救う言葉をはっきりと口にしてくれたことに気づき、僕のことを学校生活における唯一の希望として頼りにし続けようと思った。

ウ 皆が自分の言葉遣いをからかう中、僕だけが皆に対抗し力強く勇ましい調子で怒鳴りつけてくれたことから、ようやく真の友人を見つけたようで前向きな気持ちになった。

エ 皆が自分の言葉遣いをからかう中、僕一人だけは皆に合わせることなく、勇気を出して自分のために言葉を発してくれたことで、ようやく味方が得られたように思い嬉しかった。

オ 皆が自分の言葉遣いをからかう中で、僕一人が勇気を振り絞って自分のために言葉を発してくれたことから、今後僕が自分の代わりに皆と戦ってくれるはずだと期待を抱いた。

問八 ―線⑪「じゃあね、だなんて、くでなかつたんだろ」ありますが、ここから僕のある変化を読み取ることができます。

その変化を説明したものと最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 以前は、「じゃあね」という言葉は典型的な標準語であり、話せない人などいないと考えていたが、現在では、瑞穂のように方言優勢の環境で育った場合、器用な人間でなければ習得が難しい言葉の一つであると考えようになった。

イ 以前は、都会であつても地方であつても皆標準語しか話していないはずだと思込んでいたが、現在では、瑞穂のように地方出身者の中には方言しか使用できず標準語の環境になかなか親しめない人間もいると考えようになった。

ウ 以前は、方言優勢の環境で育った地方の人も時に応じて何の問題も無く標準語に切り替えられるものだと思っていたが、現在では、瑞穂のように要領が悪い人間の場合は、言語の切り替えは容易なことではないと考えようになった。

エ 以前は、地方の人も自然に標準語を話すものと思っていたが、現在では、言語は人間の存在に根差したものであり、瑞穂のように標準語への切り替えは自己の存在基盤を揺るがしかねないと抵抗する人間もいると考えようになった。

オ 以前は、地方の人も時に応じて自然に標準語を話すものと考えていたが、現在では、言語は人間の存在に根差したものであり、瑞穂がそうだったように方言と標準語の切り替えは必ずしも容易なことではないと考えるようになった。

問九 ―線⑫「十歳の頃から全然成長していないみたいだ」とありますが、こういった部分が成長できていないというのはですか。

その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 僕は瑞穂の未来に期待して好きになった経験から、みのりのような未来を期待できない女性と本気で恋をすることができなくなっているという所。

イ 僕は瑞穂に恋した時と同様に、今でも女性との関係に子供じみた未来の幻想ばかりを抱き続ける傾向にあり、みのりとの現実的な問題から逃げているという所。

ウ 僕は瑞穂へ抱いた鮮烈な恋心をいまだに強く持ち続けていて、現在のパートナーであるみのりを心から愛することがなかなかできないという所。

エ 僕は瑞穂の未来に期待して恋をしたのと同様に、みのりに対しても等身大の彼女を見るのではなく、未来の大きな飛躍ばかりを期待してしまうという所。

オ 僕は瑞穂の未来を信じ短所には目をつぶって恋をしたことから、みのりに対しても短所とは向き合わずに未来の飛躍ばかりを夢見てしまうという所。

問十 ―線⑬「そんないくつかの予感に揺れていないで」とありますが、本文からは「みのり」についての「いくつかの予感」を表した次の一文が抜けています。戻すべき箇所の直前の五字を抜き出さない。

《みのりはいつか、どこか全然思いも寄らないほうへ跳ねていくのではないか。》

問十一 本文について説明したものとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 回想部分も含め一貫して僕の視点からのみ描き、瑞穂の視点をそこに加えることはなかったため、この描写方法は幼い頃に抱いた二人の淡い恋心が今後とも重なり合うことではないだろうということを読者に予感させる。

イ 僕は、みのりとの現在の日々と瑞穂との過去の思い出の間を何度も行き来しているが、これはみのりとの将来を心に誓いながらも、瑞穂への思いを断ち切れないままに終わる僕の迷いを暗示している。

ウ 気弱な都会育ちの僕の周辺に、今にも跳ね出しそうなみのりと方言を必死に守ろうとする瑞穂という二人の地方出身者を配することで、地方出身者の力強さ、方言の豊かさを対比的に描き出すことに成功している。

エ 小学四年生の時に出会った瑞穂をまだ咲いていない「花」と表現することで、内側にこれから大輪の花を咲かせる力を蓄えつつも、外面的にはか弱く可憐に見えた瑞穂の様子を読者に印象づけている。

オ 登場人物の内面に一切立ち入らない客観的な描写方法が採用されており、僕、瑞穂、みのりという三人の主人公たちの複雑に絡み合う心理状態が直接的に読者に伝わるよう工夫されている。

※らんには記入しないこと

氏名

得点

1

2

3

二

※

問一

問二

問三

問四

問五

とらうこと

問六

問七

※

問八

問九

問十

問十一

問十二

と

※

三

問一

問二

問三

問四

問五

ア

イ

ウ

エ

オ

※

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

※